

物語

気持ちの読み取り

学習日
月 日

例題

● 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「そらとぶことりに／てがみをもたせた

あてなはだれかな／だれもしらない なまえ

ひみつのてがみ はこびとおせるかしら

ねえ だいじなてがみを／かぜが まいあがらせる」

ピアノの音や、チサトちゃんの歌が、わかるみたいに、

インコは、はしやぎまわっていました。ノリコは、「きれ

いにしてあげましょーね」といって、インコのかごを、底

からはずし、下にしいた新聞紙をとりかえてやろうとしま

した。

すると、あっ！ ちょっとしたはずみにかごの下からぬ

けてでたインコが、ばたばたと、部屋の中をまわったか

と思うと、あいていた窓から外に飛びでていってしまいま

した。ノリコは胸のなか^{むね}が、どきどきどきとしてそれっ

きり胸から何かが、はじけとぶのじゃないか、と思いまし

た。

うわっうーん！ ノリコは、ひとりのときは泣きません

でしたし、お父さんが、しごとから帰ってきてても泣きませ

15

10

5

んでいたが、心の中では、泣きっぱなしでした。そう、ノリコの顔が、あんまり泣きべそ顔ばかり、朝も夜も、しているの、お父さんはインコを一羽、お金で買ってやることにしました。ノリコが、新しいインコに、えさをやったり、水をかえたりしてやったのは、もちろんです。そして、こんどは、もっといいねいに、かごの新聞紙をとりかえ、名まえも、〈カロちゃん〉とつけてやりました。しかし、それで、飛びだしていった、帰ってこないインコを、忘れたかという、それは、忘れられやしませんでした。

そうして、何日もたって、ある日、学校からの帰りに、人のいない庭の植えこみで、インコを見かけたときには、どきつとしました。そのインコは自由に、木の枝から枝へと、ぴよぴよ飛んでいます。「あ、あれは、わたしの……」と思って、ノリコは、目をこらして、見つめました。ほんとに、このあいだまで、じぶんがえさをやっていたインコかどうか、わかりません。

「生きてるわ、元気だわ、きつと」、ノリコは、名まえもつけなかったインコが、ひろびろとした外を、自由に飛びまわって、元気でいられると知って、ほつとしました。

家へ帰ってから、〈カロちゃん〉にえさをやり、ノリコは、何やらうれしそうに〈カロちゃん〉に話しかけてばかりいました。たぶん、ノリコは、外へ出ていきたいのかい、でも、ここにいてね、わたしたち、お友だちでしようとか〈カロちゃん〉に、くりかえしたのんでいたでしょう。

〈木島始「飛びでたいの？」より〉

40

35

30

25

20

□ (1)

——線①「胸のなかで、どきどきどきとしてそれっきり胸から何かが、はじけとぶのじゃないか」とありますが、ノリコがこう感じたのは、どういことがあったからですか。書いて答えなさい。

考え方

物語を読むときには、気持ちを表すことばに気をつけて読み進めていきましょう。ここにあるように「胸がどきどきとする」のは、なにか思いもけなかったことがあったときです。ノリコは、インコがにげてしまったので「たいへんだ、どうしよう」と思ってどきどきしたのです。「胸から何かが、はじけとぶ」という表現については、たとえば「心がからっぽ」などという言い方があることを思い出しましょう。少しむずかしいかもしれませんが、がっかりした気持ちをよく表しています。

□ (2)

——線②「新しいインコ」を大切に思うノリコの気持ちがよく表れている行動を、次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア えさをやったり、水をかえたりしてやったこと。
イ 前よりもっといいねいに、かごの新聞紙をとりかえたこと。

ウ 「カロちゃん」と名まえをつけてやったこと。

エ 帰ってこないインコのことを忘れなかったこと。
オ 空を自由に飛ばせてやったこと。

考え方

物語の登場人物の気持ちは、「悲しい」「うれしい」「どきどき」「がっかり」などの、気持ちをじかに表す言い方ではないところからも読み取れます。むしろ、こうした表現を見つけないことが大切です。ノリコが「いいねいに」新聞紙をとりかえるのは、「今度こそしつばいしない」という強い決心の表れです。前にはつけそびれたインコの名まえを今度はつけたところからも、「今度は長くなかくするんだ」という決意が読み取れます。

□ (3)

——線③「何やらうれしそうに」とありますが、ノリコがうれしそうにしているのはなぜですか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 「カロちゃん」となかよしになれたから。
イ にげたインコも元気でいると思えたから。
ウ 「カロちゃん」はにげないと思ったから。
エ にげたインコが帰ってきたから。

--

考え方

気持ちを表すことばがあったら、注意して「どうしてそう思うのか」を考えましょう。ノリコは、「カロちゃん」を大事にしていますが、にげたインコのこととも思っているのです。

● 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

《毎年秋が深くなると、「私」の家では所有する松林で、松茸狩りをするのが年中行事となっていた。ところが、その年の秋、なぜかこの松茸狩りはとりやめになった。残念でたまらない「兄」と「私」は、ある日、とうとう親にないしよで、電車を乗りつぎ、家から遠くはなれた例の松林に出かけてきたのだった。》

私は兄の後ろについて松林の中に入っていた。雑草の下生えにまじって、いばらがからまっていて、私たちは何度もしや腕にかき傷をつくった。しかし兄が言うように松茸は見つからなかった。私たちは前の年の例から考えてバスケットいっぱいとは言わないまでも半分近くは集められると思っていた。しかし雑草がしげっていたためもあったのだろうが、それにしてもいっこうに松茸は見つからなかった。兄はしきりと私に別の場所へ行つてさがすように言うのだが、私は兄から遠く離れるのがこわかった。私は兄の姿を見失わないように、遠くからついてゆくことで精いっぱいだった。

谷間に早くからだだよっていた冷たい、黒ずんだ影が、いつか松林の斜面をはいのぼっていて、空が明るくさえて白く光りはじめた。そんな時刻になっても私の見つけた松茸は数えるほどしかなかった。私は、兄がそれをしかるかもしれないと思い、かれ松葉をくつ先でほってはさがしま

15

10

5

わったが、まるで別の場所にきたように松茸は見つからなかった。

これ以上では足もとも見えなくなるという時間まで、兄は帰ろうと言いださなかった。しかし兄とならんで松林の斜面を下りはじめたとき、兄のバスケットの中にも大して松茸が集まっていなかったのを私は知った。私は自分の分を兄のと一緒にして、そのバスケットを持った。兄は地面に落ちていた枝を拾ってそれをやけになって振りまわし、草をなぎ倒しながら歩いていった。私たちは門のかたわらの鉄条網をくぐりぬけて外に出ると、もう一度、荒造りの木とびらをおおいだ。そこには、前には気がつかなかったが、番小屋の戸にかかっているのと同じ会社名が書かれていた。私が兄の方を見ると、兄は顔をそむけ、黙って歩きだした。私はまだはつきりそこで何が起こったのか理解するには十分大きかったとは言えなかった。ただ父母にそむいているさびしさと、人氣ない山のなかで日が暮れようとしている心細さとが、荒れ果てた松林を見た不安な思いと一つになり、時おり私の鼻孔を、刺激的な痛みとなつてのぼつてきた。私はバスケットをさげ、半ば鼻をひくつかせながら、郊外線の駅まで下りていった。

その時兄がどんな思いを抱いていたのか、私は知らない。しかし兄は地藏堂の前まできたとき、私からバスケットをひたたくと、あつという間に、そのなかみをそばの溪流の中にすててしまった。私はそれを見ると、それまでこらえていた悲しみが急にふれてきて、思わず声をあげて泣きはじめた。兄はしばらく黙って暗くなった溪流の面をながめていた。それから私の手をとると、「。そんなこ

40

35

30

25

20

と知らなかったんだ。でも、もう二度と来ないよ。二度と来るもんか。」と吐きすてるように言った。しかし兄はそれきり駅に着いてからも、プラットフォームの端の暗やみのなかに立って、私と話そうとはしなかった。

辻邦生「夏の砦」より

45

① 線①「兄が言うようには」とありますが、ここより

前の部分で、兄はどんなことを言ったと考えられますか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 松林に入れば、去年より多くの松茸が採れるさ。

イ ぼくたちだけでは、松茸を採るのは無理さ。

ウ 見つけたいと思って探せば、松茸は見つかるさ。

エ ぼくたちだけでも松茸は簡単に見つけられるさ。

② 線②「谷間に早くからだだよっていた冷たい、黒ず

んだ影が、いつか松林の斜面をはいのぼっていて、空が明るくさえて白く光りはじめた」という情景が、「私」にある気持ちを思い起こさせると考えられますが、その気持ちを示すことばを、本文中から三字で書きぬいて答えなさい。

③ 線③「前には気がつかなかったが、番小屋の戸にか

けてあるのと同じ会社名が書かれていた」という部分に注目して、☐に入る「兄」のことばとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア もう、松茸は採られてしまっていたんだ

イ もう、うちの松林じゃなくなっていたんだ
ウ もう、松茸は出なくなってしまったんだ
エ もう、この松林に来てはいけないんだ

④ 線④「私からバスケットをひったくると、あつとい

う間に、そのなかみをそばの溪流の中にすててしまった」のはなぜだと考えられますか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア このまま松茸を持って帰れば、ないしよで出かけたことがわかり、ひどくしかられることにハッと気が付いたから。

イ 松茸狩りがとりやめになった理由を知り、同時に、どうにもできないほど激しいいら立ちにおそわれたから。

ウ 父の言いつけにそわいて来たのにもかかわらず、少ししか採れなかったのがひどくはしく思われたから。
エ 駅までまだ遠く、あせっているのに、松茸ばかり気にしてさっさと歩かない私を見て、思わずカッとなったから。

単元2の新出漢字

8ページ

底 テイ/そこ

飛 ヒ/と(ぶ・ばす)

泣 キュウ/な(く)

1 物語 場面の読み取り (p.4~7)

例題

- (1) ① (例) 机の上
② (例) (家のとなりの) 原っぱ
(2) ウ
(3) イ

確認問題

- (1) ① (例) 六年生
② (例) 太一が小学校の一年生になったとき。
(2) ア
(3) ウ
(4) (例) (頭に金色のつのをつけた) 小さな鬼。

解説

- (1) 基本的な「いつ」「どこで」「だれが」を正しくおさえないと、物語の読み取り方をまちがえることになります。この文章では、げんやい、太一は六年生であること、小学校に入学したときに机を買ってもらって、六年間使いつづけてきていることを、まちがえないようにしましょう。
(2) 机が大きいことは、「かえってうれしかった」とあります。全

然使わなわけでもないけれど、かんじんの勉強のときはこの机ではやらなかったと書いてあります。まだ、ひとりで寝て着いて勉強する習慣はついていなかったのでしょう。

- (3) 「太一のほうもきくりとして、あたりを見まわした」とあります。「だれもいないはずなのに、気味が悪い」「でも、これがあるのはくやし」…そんな気持ちから、大きな声を出したのです。
(4) 「太一くん、ここだ」ということばから、ずっと読み進んでいかなければ、このことばを言ったのがだれかはわかりません。とちゅう、机の上にあるものがいらいそうしようかいされていますが、それを読んでいさうちに、物語の流れがわからなくなってしまう、ということのないようにしましょう。

2 物語 気持ちの読み取り (p.8~11)

例題

- (1) (例) (か)に(した) インコが、部屋の中から外に飛び出ていってしまったこと。
(2) イ・ウ
(3) イ

確認問題

- (1) エ
(2) 心細々
(3) イ
(4) イ

解説

- (1) 例年の松茸狩りとはちがって、今回兄弟二人だけで松茸探しをしていることに着目します。兄弟は二人だけでも松茸はすぐに見つかるとも言っていたでしょう。ところが、なかなか見つからないという文脈になっていることをおさえます。
(2) 本文中に「人気ない山のなかで目が暮れようとしている心細々」とあります。
(3)・(4) 番小屋の戸と松茸のとりびらに、見知らぬ会社の名前が書

かれていたということから、松林が兄弟の家の持ち物からその会社の持ち物になったこと、そのために今年の松茸狩りが中止になったことがわかってきます。その事情がわかった兄の気持ちを考えてみましょう。